

# 平成28年度事業計画書

(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

## I. 事業計画概要

公益財団法人美術工芸振興佐藤基金として再出発して、本年度は5年目になります。本年度も過去の事業の経験を活かしながら、美術工芸を通じて国際間の相互理解の推進と我が国文化の発展に寄与する、という目的の達成のために事業を行います。

また、本年度は、当法人が運営する石洞美術館が開館して10周年の年に当たります。石洞美術館は、開館以来、館蔵の美術工芸品を中心とした展覧会を26回行ってきましたが、10年を一つの区切りとして、美術工芸品の新たな魅力の発信を行うとともに、地域の方々と連携して、地域文化の発展にも寄与する事業を積極的に行います。

## II. 事業毎の計画

### 1. 美術工芸等に関する資料の収集、保存、調査研究、展示及びそれらの資料を活用した事業

#### (1) 石洞美術館

##### a. 展示計画

石洞美術館の展覧会は、原則として年3回の企画展を実施していますが、本年度は、下記の二つの展覧会を開催します。

#### 「第45回伝統工芸日本金工展」

公益社団法人日本工芸会との共催の展覧会です。平成24年度より、石洞美術館で隔年開催しており、本年度で45回を数えます。弥生時代に始まる我が国の金属工芸は、その技術が連綿と伝えられて今日に至っています。しかし、伝統を保持するということは、時代の要請に応えながら、新しい試みが続けていくことでもあります。この伝統工芸日本金工展は、金工作家の新しい試みの場でもあり、金工の魅力を再発見する機会になっています。この展覧会を通して、現代の金工の魅力に触れて頂きたいと思います。

「古染付 —このくにのひとのあこがれ かのくにのひとのねがい—」

古染付は、中国明時代末期の天啓期（1621～1627年）を中心とした時代に、中国の景德鎮民窯で焼造され日本に輸出された染付磁器の一種です。その器形は志野や織部焼に似ているものも多く、日本人があこがれて、中国に注文した品ではないかと考えられています。古染付には、虫喰いと呼ばれる釉薬の欠けがあったり、絵付けも自由奔放で、粗雑な器に見えますが、図柄は素朴で味わいが深く、日本人たちには大変愛されています。しかしながら、その絵柄を読み解いて行くと、そこには長寿や出世などの中国の人たちの願いを知ることができます。本展覧会では、日本と中国の両地の人たちが器に込めた思いについても紹介し、古染付の魅力に触れて頂きたいと思います。

なお、石洞美術館は、この古染付を凡そ180件490点所蔵しており、日本でも屈指の質と量を誇るコレクションとなっています。展示スペースの関係で、全ての作品を一度に展示することができないため、3回に分けて展示を行います。

「第45回伝統工芸日本金工展」	4月29日（金）～6月19日（日）
「古染付」	7月16日（土）～4月2日（日）

#### b. 地域との連携活動

足立区内の他の3施設と協力して、石洞美術館の展示室でコンサートを開催し、美術館の新たな魅力を発信します。

#### c. 広報活動

昨年度に引き続き「ぐるっとパス」に参加し、美術館・博物館に興味を持っている人が来館するきっかけにします。

#### d. 資料の収集

魅力有る展示を行っていくため、資料収集方針にしたがって、今年度も新たな資料の収集を行います。

## 2. 美術工芸等の創作活動、調査研究及び普及活動に対する助成及び表彰事業

### (1) 助成事業

本年度は下記の研究に対し助成を行います。

- a. ハーバード大学東アジア言語文化学科留学生への研究助成
- b. 生田ゆき 紅型型紙に見る本土との交易史
- c. 松崎裕子 イギリスのスリップウェア研究  
—マイケル・カーデューを中心に—
- d. 小林祐子 安藤緑山の牙彫に関する調査・研究
- e. 佐々木類 蓄光ガラスのガラス造形への応用

### (2) 表彰事業

淡水翁賞（若手金工作家奨励賞）

若手金工作家奨励のための淡水翁賞は、本年度で33回目を迎えます。

第33回淡水翁賞の募集は9月頃開始、12月25日をもって締め切りとし、選考の上、3月に授賞式を行います。